地域創生学群成果発表会 SUPER LIVE 2024.2.9

i-Design「地域創生実践演習」稲月チーム 成果報告
つながること－NPO法人抱樸＆希望のSUBACOとの関わりを通して

本日の報告内容

①「NPO法人抱樸」「希望のSUBACO」のこと

②実践演習の目標の設定
　取り組んできたこと

③主な活動

❶ 稲月先生ゼミ生との交流
❷ 「まちの先生企画」の実行
❸ 抱樸スタッフの方へのインタビュー
❹ 各自の自由意志による活動

④まとめ　学びと活動の継続について

NPO法人抱樸のこと

私たちの理念と想いより
https://www.houboku.net/

1988 年 12 月、私達は路上に生きる人々を訪ね夜の町を歩き始めました。数名のボランティアがおにぎりを携え路上の人々を訪ねます。「何ができるのか」「何をすべきなのか」、手探りの活動が始まりました。訪ね歩き、傍らに座りひたすら耳を傾けました。

活動開始から 25 年を経た 2014 年、私達は名称を「抱樸」（ほうぼく）としました。山から切り出された原木・荒木（樸）をそのまま抱き止めることを意味するこの名称は「自己責任」など、「断る理由」が横行する日本社会に対する「対抗文化」を意味します。

すでに、日本の貧困と格差は常態化しています。私達が目指すのは「抱樸する社会」です。「断る理由を断念した社会」です。路上生活者の支援から始まった活動は、困窮し傷ついた家族、泣くことさえできない子どもたち、さらに孤立する人々、仕事を失った人、生きづらさを抱える人々、罪を犯した人々、障害のある人、高齢の方々、住宅確保困難者支援に広がりました。現在実施している事業は 27 となりました。すべては「出会った責任」を果たすためでした。私達が目指すのは「伴走型支援」です。従来の問題解決型の支援に加え、たとえ解決できなくても「つながり続ける」ことを大事にします。「伴走」が社会の前提となることで、私達は「助けて」と言うことが出来ます。抱樸が目指すのは「助けてと言える社会」です。

「希望のまち」「希望のSUBACO」

小倉北区神岳１丁目

現在、希望のまち建設予定地には、プレハブ小屋の「希望のSUBACO」が建っていて、誰もが立ち寄れる地域活動が行われています。

毎月、おしゃべりカフェ・まちの先生企画・地域清掃・青空マルシェなどが営まれ、地域交流の場になっています。

実践演習の目標の設定

「希望のまち」建設予定地（神岳１丁目）での地域活動を知らされて！

活動案として4つの案が提案され、議論の結果
「希望のSUBACOのまちの先生を企画する ＆ 希望のたまご委員会に参加する 」
「希望のまちプロジェクトにかかわる人たちに『どのような形､想いでかかわっているのか』を聞き、地域に伝える（メッセンジャーとなる）」活動を行うこととした。

※「希望のSUBACO」への関わりを通して、「希望のまち」の取り組みに学び、気づきを得る。
※ 稲月先生ゼミ生と学びの交流を図る。
※ 学びの共有や情報の交換を図り、チーム内の協同化に努める。
※ 学んだことを地元（各自の生活圏）の地域活動に活かす。

※４つの案の残りは、「希望のSUBACOのマルシェ企画 」と「希望のまち１階ホールの活用企画」です。

取り組んできたこと　黒文字は各自の自由意志による活動　赤文字は全員で取り組んだ活動

NPO法人抱樸
　炊き出し（弁当配布）へのボランティア活動（10月～２月）
　夜間の訪問パトロールへの参加　2024年1月12日（金）22時30分～24時30分

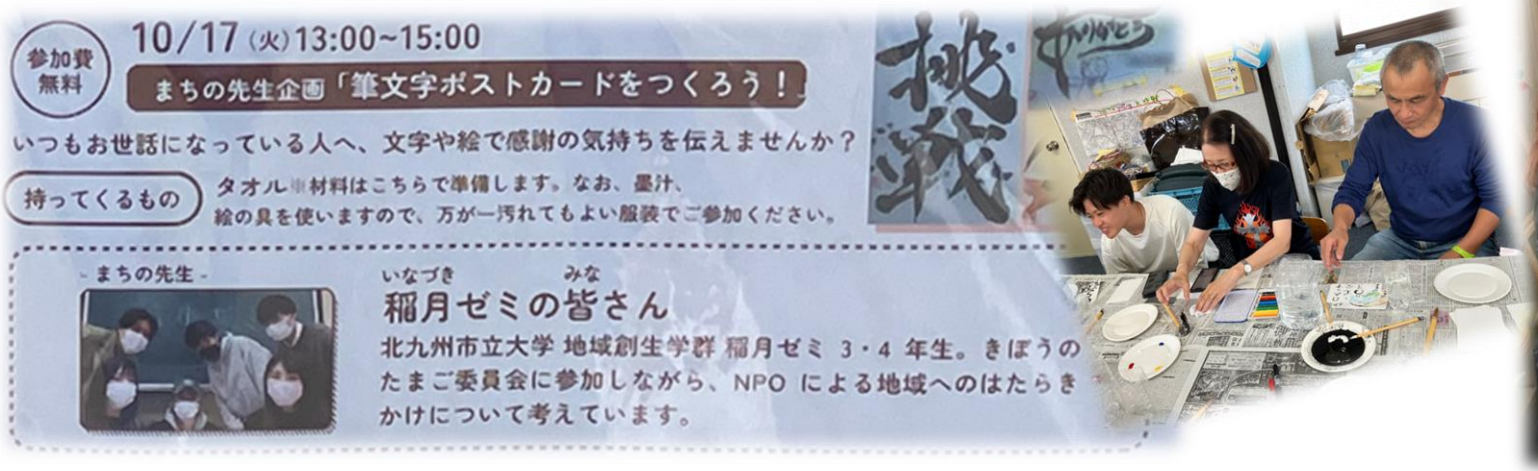
希望のたまご委員会へのオブザーバー参加　11月13日（月）　12月19日（火）
希望のSUBACOの活動へ参加　各月の「にわカフェ」におじゃまして
　各月の「まちの先生企画」への参加
　まちの先生企画の実行　12月12日（火）
　ー紙粘土を使ったクリスマスオーナメントづくりー
ゴーイング・ホーム・デイ（総勢 320人で大運動会）へ参加　10月21日（土）
希望のまち「大規模マルシェ」への参加　11月 ４日（日）
希望のまち「竹あかり2023」への協力参加（準備 ＆ 片付け）　12月 ３日（日）

まちの先生企画　まちの先生企画
稲月先生ゼミ生との交流　10月17日（火）　11月２日（木）　11月23日（木）　12月12日（火）
北九州市おける住まい支援システムを考える研修会へのZoom参加　11月９日（木）
希望のSUBACO 抱樸スタッフの方へのインタビュー　12月７日（木）
中間市市民生活相談センター 抱樸スタッフの方へのインタビュー　2024年1月15日（月）
足立市民センターの人権市民講座「NPO法人抱樸 生笑一座」講演会への参加　12月23日（土）
地域創生学群成果発表会 SUPER LIBE 報告　2024年2月9日（金）

その他　親睦昼食会
　木曜１限目授業後の「学生交流スペース」での作業 ＆ おしゃべり

主な活動　❶ 稲月先生ゼミ生との交流

10/17 ゼミ生企画「筆文字ポストカードをつくろう」に参加



11/2　稲月先生ゼミ生との打ち合わせ （B301教室）　交流＆支援を依頼

①地域創生に関して、協同の学び合いができないものか。

②私たちの「まちの先生」の企画を一緒に取り組んで欲しい。

11/2の打ち合せ

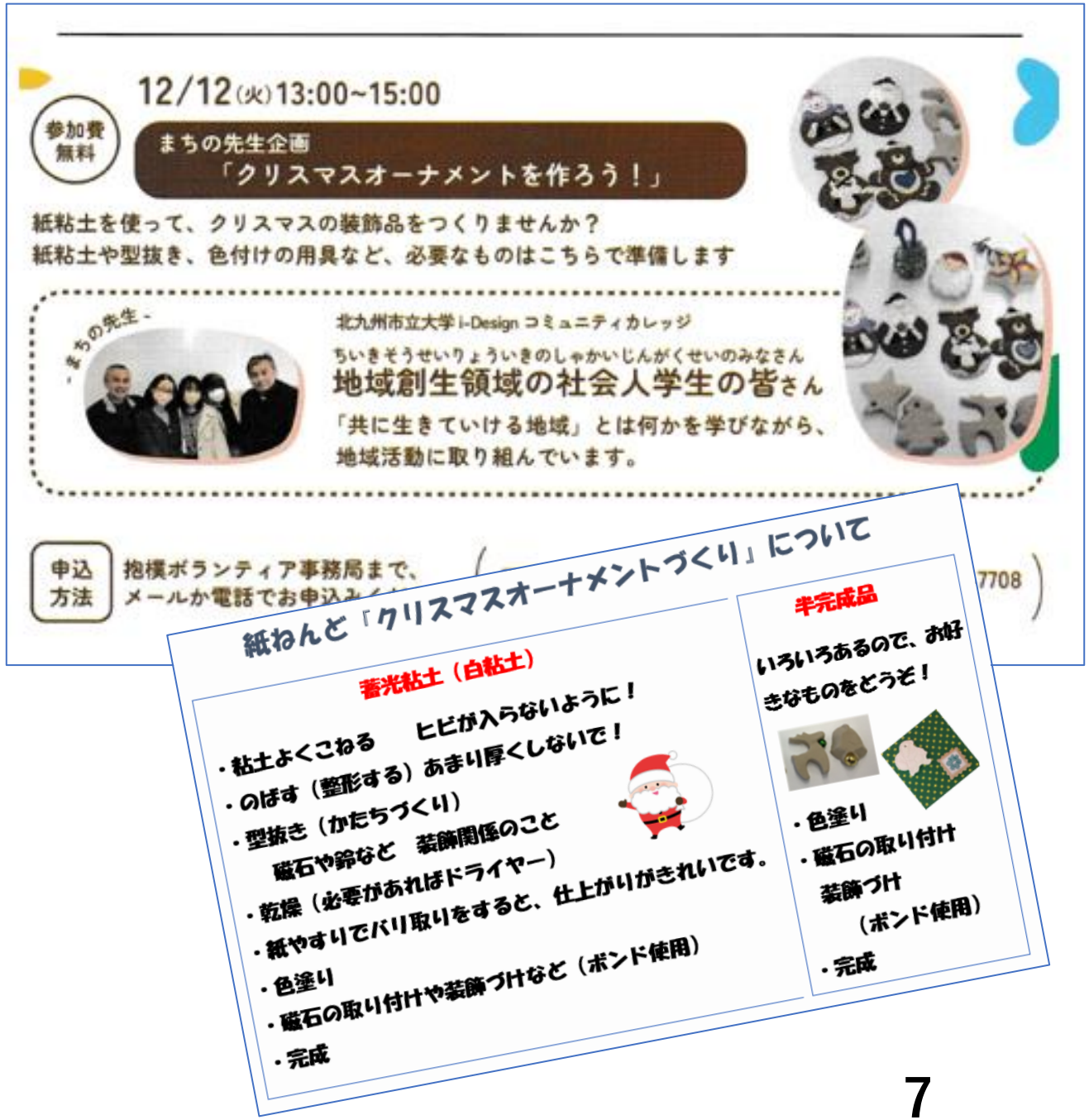
11/23 ゼミ生と一緒に「オーナメントづくり」の事前準備

❷ 希望のSUBACO「まちの先生企画」の実行

各自の企画案を持ち寄り、検討した。どの案を行うにしても、全員が小先生となって、参加者と一緒に作品づくりを楽しむこと。希望のSUBACOに集う方々と交流することを一番の目的とした。そのため、比較的やり方や手順の簡単な作品づくりを検討。

・クラッシュガラスアート（ガラス絵）づくり
・自然の素材を使ってのオブジェづくり
・陶芸作品づくり
・アロマキャンドルづくり
・紙粘土を使った作品づくり

準備日程や当日の時間枠を考え、１２月の時期的なこともあり、紙粘土を使った「クリスマスのオーナメントづくり」の企画に落ち着いた。



２０名程の参加でにぎわいました。

〈成果〉

- 事前の計画、諸準備・実行まで、全員の関わりとそれぞれの役割に応じて取り組みを進めることができた。
- 準備及び当日に、ゼミ生の協力を得ることができ、無事に終わることができた。
- 20 名程の参加となり、思った以上に盛会であった。
- 短い時間であったが、作品づくりを楽しんでいただけた。
- はじめは遠慮がちに作品作りをためらっていた方にも、興味を示していただき、参加してもらえた。
- 作品づくりを通して、希望の SUBACO に集う方々との会話や交流を行うことができた。

〈反省点〉

- スタッフの方からのオーナメントづくりの実施にあたっての指摘がなされ、ハットさせられたこと。

「SUBACO に集う方の中には、オーナメントを持ち帰って、飾り付けを楽しむ状況にない方もおられることを、ぜひ心に留めておいて欲しい」

- 一部のメンバーに負担が偏ってしまった。
- 私たちで参加者を募る呼びかけができていないこと。

❸ 抱樸スタッフの方へのインタビュー

抱樸ボランティア部・希望のSUBACOスタッフ より話を聴く

共感したこと・感じたこと・考えさせられたこと

奥田理事長から「よし、工藤会の跡地を希望のまちにする」と宣言された際に、「どうやって、誰がするのか」とその日から悩み続けたとのお話に、同じ女性として、母として、妻として、悩むのは当然のことだと感じた。

「希望のまち」プロジェクトが進む中、ご自身の「置かれた場所で、為すべきことを一生懸命考えて実行する」と決め、実行されていることは、誰にもまねできない、行動である。そこに存在意義を感じた。

また、若いスタッフの「希望のまち」にかける意気込みを感じ、しっかりとした考えを持って従事されていることが、抱樸の強みではないかと感じた。

「出会った方々に、何が必要かを考えるうちに、誰にも言われなくても、自分たちの意思でやっていく。」「日々大事件、でもやり続けられる」ということ。この言葉の意味合いを考えさせられた。

「抱樸は、この世の中に何が必要かをみんなで考えながら、手弁当ではじめた組織」「出会った方々に『何が必要か、誰が必要か』を毎回、日々悩み考えていくうちに、３０数年の時が過ぎ、現在に至っています。」「誰にも言われなくてもやる。」「抱樸の中に、自分たちの意思決定でもってやっていく組織をもてていることが、抱樸の肝であり命であって、大きな特徴だと思っています。」

数十年に及ぶ途切れることのない想いの持続、これらの言葉から感じたことの一つは、支援するという営み、そこに込められた想いの深さです。そこには、出会った人の人生や命に寄り添っていくことへの悩みや葛藤が幾重にも重なっており、とてつもなく重い意味合いが含まれていると感じさせられました。

「生まれ育った北九州を同世代の若者がどんどん離れてしまうことに寂しさを感じる」という言葉は、自身の育った街も同様なので、よく理解できた。

「地域に入っていけばいく程、面白さに深みがある。目に見えにくいが、広がりが感じられ、面白く思い続けられる。もっと広がり、横のつながりでオール北九州になっていけたらいい。」

これらの話に「希望のまち」への意気込みが感じられた。

私たちが伝えていくこと

どうやったら「希望のまち」が出来るのか、見えない地域の線引きはどうやったら解消できるのか。今日困って助けを求めている人を、助ける側に居ると思っていても、ある日突然、自分が「助けて」と言う日が来るかもしれない。何事も他人事ではなく、自分事として考えることが必要。そして、誰もが気負わずに、自然に「助け」「助けられる」コミュニティづくりが必要なのではないか。

これまでの自分は、路上生活者を見ても見ぬふりをしていた。困窮者のことを知ろうとも思っていなかったこと。加えて、派遣労働者の劣悪な労働環境や貧困からの脱却の困難さなど、社会が作り出している側面があることを知らされたこと。これら考えさせられたことについて。

社会的孤立が加速している。今までの価値観や意識を変えていかないといけないこと。人とのつながり、助けてと言える場所が必要だということ。

伝えたいことの一つは、かつての自分のホームレスの方への冷たい眼差しである。自身のなかの予断や偏見、差別性につながるものの見方が問われているということ。学ぶことは変わること。

「希望のまち」との今後の関わりについて

これからも、細々とであっても、自分に出来る範囲で、出来ることを出来る限り続けていきたいと考えている。

「希望のまち」のコンセプトは「家族のような関係をつくる」こと。「いろんな人が集まって　いろんな人がちょっと休めて　いろんな人が出会って　いろんな人が笑顔になって　いろんな人が泣きたいときにはちょっと泣けて　いろんな人が少し元気になって　いろんな人が一歩踏み出せる　そんな『希望のまち』になったらいいなと思っています。」

この詩的とも言えるフレーズに紡がれた想いに、少しでも関わっていきたい。

「寄り添いつながり続けるということ」…私のやるべきことは、○○さん、○○君など、彼女、彼らとの再会にある。

話に刺激を受けたことを無駄にしない“かかわり”を保ちたい。

学びの継続を図り、自身の家族や地元の地域活動に繋げていきたい。

❹ 各自の自由意志による活動

希望のSUBACO　各月の「にわカフェ」におじゃまして
　　各月の「まちの先生企画」への参加

希望のまちの
　　「大規模マルシェ」への参加
　　「竹あかり」への協力参加

抱樸の炊き出し（弁当配布）＆ 訪問パトロールへの参加

各月の「にわカフェ」におじゃまして

「希望のSUBACO」で行われている各月の「にわカフェ」……
　10月は青空のもと、庭にテントやタープを張って、会話が楽しまれました。何度かおじゃまするうちに、６年間、野宿生活をされていた方と会話を交わすことができるようになりました。

１２月のクリスマスカフェには、たまたまSUBACOの前を通りかかった、足立中学校や小倉南高校の生徒さんたち数名が立ち寄ってくれました。おしゃべりが一段と弾み、にぎやかな、ひと時となりました。

各月の「まちの先生企画」への参加

11月のダーニング教室　12月の歴史教室へおじゃましました。

寿山歴史会による「寿山の歴教室 」妙見さんと和気清麻呂

11月4日（日）大規模マルシェへの参加

マルシェを楽しみながら、稲月先生のゼミ生さん
九州国際大学の学生さんと交流を行うことができた。

11月13日実施の「希望のたまご委員会」にオブザーバー参加する。
この日の会合で「大規模マルシェ」の成果と課題の整理がなされ、18店舗の出店と来場者は延べ330名程あったと知らされた。大変、賑わいのある地域交流がなされたと感じている。

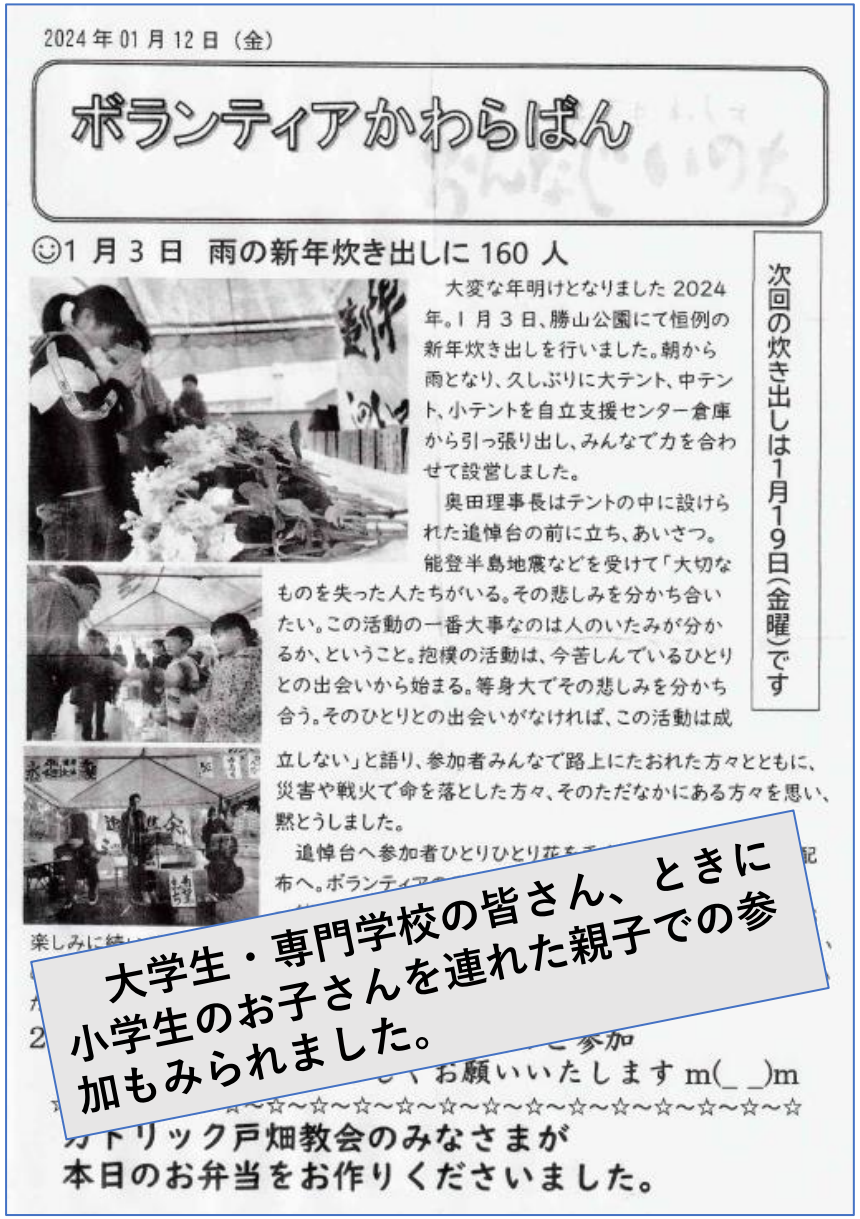
「希望のまち竹あかり2023」への協力参加（準備＆片付け）12月３日（日）

「希望のまち」建設を見据えた数々の地域イベントが企画されている。その一つに「竹あかり」がある。当日の来場者は延べ431名と多く、大変な賑わいを見せていた。私たちは当日の準備と後片付け、後日の竹材整理のボランティアとして参加した。

地域の人達との交流が楽しまれた「希望のあかり」が灯されるイベントに立ち会うことができ、冷たい夜風が心地よく感じられた。

2024の「竹あかり」は「小倉城竹あかり」とのコラボ実施となるとのこと。「希望のまち」へと連なる“あかり“ となると感じさせられた。

抱樸　炊き出し（弁当配布）への参加（10月～２月）19時15分～21時30分
訪問パトロールへの参加 2024年1月12日（金）22時30分～24時30分



2024年01月12日（金）

ボランティアかわらばん

☺1月3日　雨の新年炊き出しに160人

次回の炊き出しは1月19日(金曜)です

大変な年明けとなりました2024年。1月3日、勝山公園にて恒例の新年炊き出しを行いました。朝から雨となり、久しぶりに大テント、中テント、小テントを自立支援センター倉庫から引っ張り出し、みんなで力を合わせて設営しました。

奥田理事長はテントの中に設けられた追悼台の前に立ち、あいさつ。能登半島地震などを受けて「大切なものを失った人たちがいる。その悲しみを分かち合いたい。この活動の一番大事なのは人のいたみが分かるか、ということ。抱樸の活動は、今苦しんでいるひとりとの出会いから始まる。等身大でその悲しみを分かち合う。そのひとりとの出会いがなければ、この活動は成立しない」と語り、参加者みんなで路上にたおれた方々とともに、災害や戦火で命を落とした方々、そのただなかにある方々を思い、黙とうしました。

追悼台へ参加者ひとりひとり花を

布へ。ボランティア

楽しみに続

大学生・専門学校の皆さん、ときに小学生のお子さんを連れた親子での参加もみられました。

ご参加

お願いいたします m(_ _)m

☆～☆～☆～☆～☆～☆～☆～☆～☆～☆～☆～☆～☆～☆～☆

カトリック戸畑教会のみなさまが
本日のお弁当をお作りくださいました。

１０月から、抱樸の「炊き出し（弁当配布）」に参加する。基本は月２回だが、１２月から２月は「越冬期」の位置づけで、毎週、実施されている。

１月３日の新年炊き出しには、路上にたおれ亡くなられた方々を偲ぶ追悼の会が執り行われ、追悼台へ花を手向け、献杯をした後に、弁当の配布がなされました。皆で弁当を食したあと、子ども越冬隊のぜんざい、書き初め、バイオリンの演奏などの催しが、楽しく続きました。

炊き出しには、毎回、多くのボランティアの参加があり、テントの設営、弁当・医薬品やマスク・アメニティグッズ（歯ブラシ、石けん、髭剃りなど）・衣類毛布等の配布準備と声かけ、手渡しが手伝われている。はじめての参加の方、大分長崎熊本山口徳島大阪東京など、他府県からの参加の方もおられる。その都度、８０名を超える方々に支援物資が手渡され、温かいコーヒーや紅茶を手に、簡易テーブルと椅子を使った「青空カフェ」で、星空のもと、会話と交流がなされ、相談ごとも話されている。「炊き出し」の場が、ホームレスや生活困窮の方々との「出会い」や「つながり」の場となっていると感じられる。なお、この場に参加できない方々には、「炊き出し」終了後から深夜にかけての訪問が行われ、言葉かけや弁当や医薬品、衣類毛布などの配布が試みられている。

１月１２日（金）、はじめてこの訪問パトロールへ参加した。一人ひとりに、名前を呼ぶ声かけをしながら、“路上生活”の近況をたずねるなどされていた。言葉かけの数々や訪ね歩く真摯な姿、その訪問支援のあり様に触れ、気が引き締まる思いであった。

まとめ

学びと活動の継続について

私たちのささやかな学びは、“知ること”から始まりました。そして、『共に生きる支援・居場所づくりのこと・地域参加型の活動や学びの交流』について、人と繋がることへの想いの数々を教えていただきました。

いくつかの活動に、実際に係わることで、ボランティア活動は特別なことではなく、「何かのきっかけさえあれば」「誰でも」「いつでも」できることを学びました。

ただ、私たちの理解は、まだまだ不十分なものであり、地域活動への係わりも、ほんの少しのものでしかありません。そんな私たちですが、これらをもとに、私たちは、一歩前へ進もうと考えています。

「きっかけは自分から」「誰に言われなくてもやる」「細く長くかかわることの大切さ」の精神を胸に、i-Design地域創生での学びを日々の生活や私たちの生活圏での活動に活かしていきます。